

揺らぎの中にとどまるー「detaching」の絵画的表現

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程美術専攻日本画研究領域

学籍番号 1323901 陶虹

論文要旨

筆者は長年、うつ病や不安障害に伴う離人感・現実感喪失に苦しんできた。視界がかすみ、身体と意識がずれ、現実から浮いたような知覚の揺らぎを伴う。これは単なる病理ではなく、「自己と環境の境界が曖昧になる」切実な体験として繰り返し現れた。

筆者はこの経験を観察・記録し、次第に絵画によって視覚化しようとした。構図は定まらずモチーフは滲んだが、その揺らぎこそ感覚の痕跡だった。描くことは、崩れかけた知覚を画面で構造化し、日常へ接続し直す行為でもあった。

日常では現実感が薄れると、身体や身近な物に触れることで感覚を安定させていた。後にこれが心理療法の「グラウンディング (grounding)」¹に通じると知り、ここから制作の実践と理論の接点を見出した。制作もまた、内的状態を表すと同時に揺らぐ知覚を再構成する過程であり、そこから「detaching (デタッチング)」という概念が立ち上がった。

筆者のいう「detaching」は、「detach」や「detachment」といった用語とはニュアンスが異なる。一般に「detach」は関係の切断を指し、日本語では村上春樹の小説に見られるような「社会や他者から距離を取る態度」と理解される。『騎士団長殺し』における主人公もその例であり、この用語は孤立や心理的遠隔を示すことが多い。だが本論文で提唱する「detaching」は、喪失や崩壊を経て現実とのつながりが揺らぎ始めた時、完全に切断される手前で踏みとどまり、なおもその場に留まり続けようとする**能動的な知覚の姿勢**を指す。それは、自己と現実のズレを受け入れつつ、曖昧さに巻き込まれすぎず知覚を整えようとする姿勢であり、遮断や逃避ではなく中間的安定へのとどまりを意味する²。

本論文は、この独自の「detaching」という概念の規定を目指し、その絵画的可視化としての自作を考察するものだ。問いは「detaching」という**中間的感覚状態**をいかに絵画で表せるか、である。ここでいう中間状態

¹ グラウンディング (grounding) 心理療法 (特にトラウマ治療) における技法。五感を通して現実世界への接続を強化し、不安や解離症状の緩和を図る。Grounding Techniques: sensory methods to bring present-moment orientation, Psychology Tools. (閲覧日 2025 年 6 月 12 日)

² 村上春樹『騎士団長殺し』新潮社 2017 年；長谷川新「『日本画』という移動ルート。村上春樹『騎士団長殺し』を美術で読み解く」『美術手帖』2017 年 3 月 4 日 <https://bijutsutecho.com/magazine/insight/2447> (閲覧日 2025 年 7 月 30 日)

とは、完全な解離でも通常の知覚でもなく、その間に漂う揺らぎを伴う状態である。筆者は制作実践を基盤に、M.メルロ＝ポンティの身体図式、臨床心理学における現実感喪失の知見、現代美術の不在・余白・痕跡性などの議論を参照しながら、「detaching」の視覚構造と成立条件を多面的に検証する。

第1章では、筆者が経験した現実感の喪失や知覚の揺らぎを手がかりに、「detaching」という知覚概念がどのように立ち現れてきたのかを辿る。まず、「detach」「detachment」という既存の用語が美術や心理学においてどのように使われてきたかを確認し、その語義が筆者想定する概念規定とへだたりがあることを提示する。そのうえで、「detaching」を「離れながらもどこかに留まり続ける」といった感覚を指す言葉として再定義し、その構造的特徴を掘り下げる。あわせて、メルロ＝ポンティの身体論との接点も参照し、概念の理論的枠組みを構築していく。

第2章では、「detaching」の感覚が視覚的にどのように立ち現れるのかを、他作者の作品の分析を通して検証する。そこで、「沈黙する空間」、「所在なき身体」、「淡く残る色」、「線の痕跡」、「揺れる視線」といった要素を視覚的構成軸として提示し、これらが「離れながらとどまる」感覚をいかに支え、または反照するかを分析する。常玉（Sanyu）、デイヴィッド・ホックニー（David Hockney）、サイ・トゥオンブリー（Cy Twombly）、クロード・モネ（Claude Monet）、蔡國強、杉本博司などの作家の作品を参照しつつ、曖昧な空間構造や身体の不在、線や色彩の痕跡、視線の漂流といった視覚表現の在り方を通して、筆者の制作における「detaching」の視覚的表現との共振点と差異を浮かび上がらせる。そうした構成要素を統合する自律的にコントロールした姿勢としての「detaching」を確認し、第3章における制作実践への接続点とする。

第3章では、提出作品《あわいに》における制作プロセスを具体的に解説する。典具帖紙の貼り重ねや構図・色層の調整といった制作の微視的操作を通して、どのように知覚の不安定さを画面上に構造化していったかを明らかにする。また、内省を通じ、過去作品との連続性と変化の軌跡を辿ることで、「detaching」の構築過程としての制作の意味を掘り下げる。

なお、「detaching」という感覚構造は、筆者個人の経験にとどまらず、現代社会に広く漂う心理的な不安定さや感覚の希薄さとも共鳴するものと考え。筆者の作品や本論文が、他者が知るきっかけとなり、現代における心の揺らぎを可視化するひとつの手段となりうることを願っている。